

東京学芸大学附属図書館報

図書館ニュース

Vol.29, No.1 (2000.4)

情報リテラシー教育と図書館

高 鷲 忠 美

はじめに

現在学校教育では、従来の教師による知識の「注入方式の授業形態」が見直され、児童・生徒による「自ら学び、自ら考える」、いわゆる「新学力観」に基づく教育方式が中心にすえられようとしている。それに伴い「情報活用能力」(情報リテラシー)の必要性がことあるたびに最近文部省の審議会の答申などでいわれている。自ら課題(テーマ)を見つけ、自ら学び、自ら考え、問題を解決する。その過程で、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表・討論の仕方などの学び方やものの考え方を身につける。こうしたことを「情報活用能力」といっているのである。しかし、考えてみればこうしたことは学習の中では必須であり、これがこ

こまで強くいわれるのは、日本でこうした教育がほとんど行われてこなかったことを意味しているのではないだろうか。

言葉を換えれば、学校では知識を教えられるのではなく「学び方を学ぶ」ことが必要だということになる。これは単に初等教育のことばかりでなく、大学においては学生諸君にとってこの「学び方を学んだ」うえで、それぞれの学習を進めていくことが要請される。たとえば、諸君がどの科目をとろうと教官から例えば「来週までにこのテーマでレポートを書いてくるように」といわれることがあるだろう。そのとき、レポートの書き方を知らない、テーマのを見つけ方を知らないでは、まず大学生生活を送れない。それでは、なにをどのように身につければ大学生生活を円滑に送れるのだろうか。

目次	情報リテラシー教育と図書館(高鷲忠美).....	1
	情報リテラシーの高度化と社会科学(野呂芳明).....	3
	情報リテラシーの2つの側面(佐藤正光).....	4
	自然科学と情報リテラシー(伊藤一郎).....	5
	BIBLIOFILE 38: 学位論文とProQuest Digital Dissertations.....	7
	お知らせコーナー 図書館オリエンテーション.....	11
	LLBAがネットワークで検索可能に.....	11
	International ERICの紹介.....	11
	平成12年度図書館暦(4月~9月).....	12

特に、ある意味でレポートの集大成といえる卒業論文（学科、専攻などによって違うが、筆者の所属する専攻は400字詰め原稿用紙100枚以上）をクリアするにはどうすればよいのだろうか。特効薬はないので、以下に述べることを参考とし、レポートをきちんと書くよう努力し、「情報活用能力」を身につけてほしい。

情報リテラシーを育成する場としての大学図書館

最近インターネットの学校教育への導入が急激に進んでいる。文部省は2年後までにはすべての学校にインターネットを導入する方針なので、教員志望の学生諸君が学校現場で働く頃には、インターネット利用はごく当たり前のことになっていることと思われる。

確かにインターネットを利用すると、大量のデータが即時に入手でき、図書をはじめとする印刷資料とは取り扱いも、効率面から考えても、また児童・生徒に対するアピールといった面からも優れているといえる。ただ、問題は大量に入手できる情報のすべてが信頼に足るものではないということである。こうした問題に対処するためには、コンピュータに限らないが「情報選択能力」を養う必要がある。例えば、印刷資料、とりわけ「参考図書」と呼ばれる調べるための図書（国語辞典、百科事典、人名辞典など）を利用した調べ学習を行い、複数の資料を必ずチェックする等の演習を行うことによって、情報というものはたとえ権威のあるといわれる参考図書といえども信頼の置けない場合があることを体験させ、インターネットから得た情報もそのまま信じないという心構えを持たせなければならない。

学校教育の場でも、コンピュータを導入しその操作方法の習得に重点を置いた「情報教育」が進められようとしている。もちろん、こうしたことは重要であるが、「情報教育」と言った場合にはすべてがコンピュータから得る情報を意味しないことをまず知ってほしい。もちろん、インターネットをはじめとするコンピュータ利用は情報の収集等に欠かせない。だから、大学あるいは自分でコンピュータの操作方法やインターネットなどと

の接続、あるいは情報の収集や発信に努めてほしい。しかし、それと同時に「マニュアル」による情報探索の方法を身につけてほしい。即ち、図書館にある国語辞典、百科事典、人名・地名辞典、あるいは書誌類等の「参考図書」（調べるための図書をこういう）を知り、これらを使いこなしてほしい。そして、調べる際には、必ず複数の資料で確認をすることを覚えてほしい。こうすることで、調べた際の情報の信憑性を確認する習慣を身につけることができる。この習慣が、必ずしも信憑性の高い情報ばかりではないインターネット上の電子情報の真偽を見分ける基礎を作るはずである。

情報リテラシーというが、情報の存在を知り、情報を入手する方法をまず身につける必要がある。このために、自らが試行錯誤を繰り返しながら身につけてほしい。次にそうして得た情報をどのように加工し、まとめるかである。「論文・レポートのまとめ方」は、分野によって少々違いがあるが、「マニュアル」が英語・英文学、教育学、国語・国文学、地理学、あるいは自然科学の分野等で刊行されているので、各自がそれぞれの選択した分野での標準的なまとめ方を探し、身につけてほしい。

ともかく、学生諸君に知ってほしいのは、大学生活を充実したものにするには、まず大学図書館をよく知り、大学図書館を使いこなすことが必要だということである。図書館が何をしてくれ、何を提供してくれるのか。ある主題に関する文献を探すにはどうすればよいのか。大学図書館に求める資料がない場合には、どうすればよいのか。困ったときには大学図書館の図書館員に尋ねてほしい。こうした質問に答えるのも図書館員の当然の業務であるので（この業務を「参考業務、レファレンス・サービス」という）。

情報リテラシー（情報活用能力）を育成するには、まずこのようなことから初めてほしい。特に、教員志望の学生は、学校教育の場で、「調べ学習」などをはじめ児童・生徒に「情報リテラシー」を教える場面が必ず出てくるはずである。それには、自らがその能力を学生時代にしっかり身につけてほしい。

（たかわし・ただよし 図書館学研究室教授）

情報リテラシーの高度化と社会科学

野 呂 芳 明

(1) インフォメーション・テクノロジーが人文・社会科学にもたらしたもの

2年ばかり昔、情報教育に関する大学内の研究会が組織された際に、私は「文科系の教育におけるコンピュータ利用」という小文を書いて、次のような認識を提示した。

「人文・社会科学の分野においても、近年のパソコンの急激な普及の影響はわれわれ研究者の周辺にじわじわと及んできている。(中略) コンピュータはわれわれの研究・調査活動を支援するさまざまなアプリケーション・ソフトウェアの『乗り物』として立ち現れてきた。すなわち、われわれの『手足』や『道具』になりうるものとしてアプローチしてきたのである。」

そして、人文・社会科学分野での道具的なコンピュータ利用について、文書作成、情報検索、情報の要約と提示、情報通信、という4点に整理し、情報教育の課題を論じた。ところがこの分野の進歩は驚くほど速く、インターネットの爆発的普及とともに上の4つはまさに有機的に融合して、今までとは異質の新しい局面を開きはじめたような感がある。「道具」以上の何ものかが見えはじめています。

この新しい局面というのが具体的に何であるか言葉にするのは難しいが、強く実感していることをひとつ挙げたい。それは、文科系、理科系という学問分野の伝統的区別 ー ただし欧米にはもともと存在しないらしい ー が、根底から覆されようとしていることだ。卒業生の進路という簡便かつ端的な指標でも、文科系でありながらSE(システム・エンジニア)の職を選ぶ学生が顕著に増加している。インフォメーション・テクノロジーに関する限り、文科系対理科系という対立軸は実態面で溶解してしまった。

(2) 情報蓄積から流通・利用へ ー 研究様式の変容と図書館の役割

この趨勢は、私たちの日々の研究環境にも変化をもたらしている。文書作成の電子化やプレゼンテーションの変革(紙媒体の配布からコンピュータ画面のディスプレイへ)のインパクトは大きかったし、使い出したらやめられない電子メールやオンラインでの海外図書の直接購入など、情報化は利便性を著しく向上させた。しかしそれ以上に、研究活動の根幹に関わる関連情報検索・参照の部分で革命的ともいえそうな動向が生じつつある。

たとえば私はしばしば官公庁の各種統計データを参照する。また、われわれの研究室では専門の社会科学分野の学会誌をはじめ、かなりのジャーナルを継続購読している。これらを参照する作業は、自分たちの研究のために欠かせない基本中の基本である。ところが、それらの社会科学的情報についても、統計データが表計算ソフトウェアで再利用可能な形でインターネット上に提供されたり、全文閲覧も可能な電子ジャーナル・データベースが商業公開されたりするようになってきた。その潜在的可能性は驚くべきものだ。まさに津波のように押し寄せる情報量を前に、われわれの研究スタイルそのものが変わることは必定である。

電子化して流通する情報の飛躍的増大は、図書館のあり方にも一石を投じているように思われる。なぜならば、これまで図書館の主要な役割を構成していた情報の収集・蓄積機能が相対化されるからだ。情報の本体は外にあり、ネットワークを介しその「閲覧・利用権」だけを購入するというスタイルが普通になったら、従来の図書館はどうなるか?

これからの情報管理は、蓄積から流通・利用に比重が移るだろう。後者がスムーズに運ぶような支援サービスが大切になる。それと同時に、わが東京学

芸大学の附属図書館には、本学がこれまで蓄積してきた人的・知的財産を生かした独自の情報データベースを構築し、積極的に発信してもらいたいと思う。価値ある情報の発信源として学内外の利用者の

認知を勝ち得ることこそが、これからの図書館の存在意義であろう。

(のろ・よしあき 社会学研究室助教授)

情報リテラシーの2つの側面

佐藤 正光

情報リテラシーとは何か？実はよくわからないので、国語科的にことばの意味から考えると、リテラシーは英語の literacy で、手近な辞書によれば「教育のあること、読み書きの能力」の意味である。il-をつければ対義語で「読み書きのできないこと、無学、無教養」となる。これに関連する形容詞は3つある。

literacy 「教育のあること、読み書きの能力」

- literal 「文字の、文字どおりの、誇張なしの」
- literary 「文学の、文芸の、文学に通じている」
- literate 「読み書きのできる、教養の深い、文学に通じた」

literalは文章表現上の用語で、literaryはliterature(文学)に連結する語である。literateはその両方の意味を併せ持つだけでなく、それを「～獲得した、～能力として持つ」という意味がある。こうして見ると、literacyもまた「～能力として持つ」意味を備え、「読み書き+能力 文章表現力」と「教養、文学+能力 教養人、文学的才能」のように捉えてよいようだ。一方メディア・リテラシーということばがある。昨秋、教育TVの番組で取り上げていて、これはメディア(インターネットを含むマスメディア)を「批判的に受け止める能力」と定義していた。やはり能力を備える意味だ。そこで、情報リテラシーとは2つの側面から捉えられるようだ。一つは情報発信者としての表現能力、もう一つは受信者としての批判的受容力である。

最近の雑誌で、有名な作家がワープロの使用を次々とやめたことが話題となっている。理由は感覚的で記事を読んでも判然としないが、漢字を忘れる、文章が平板になる、文字に魂が入らないなどである。英語などは昔からタイプを使っていたから変な屈曲のように見える。しかし、日本語は漢字という表意文字を含んでいるという大きな違いに留意しなければならない。漢字の成り立ちを知ると、漢字は字そのものが人間社会のある部分を表現していて、人間の根本的な発想力に触れることができる。また中国や日本では、昔から字を書くことが芸術であった。この二つの意義は、私には思考に訴える力があるように思われる。創造的表現者である作家が手書きの感覚にこだわるのは、そうした文字文化の世界にいるからではなからうか。少なくとも我々は日本語の使用人として、文字自体が思考に訴える表意文字であることを意識する必要があるだろう。

受信者としての批判的受容力については、中国の出版事情が参考になる。現在の中国は改革開放政策のため、外国から資本を導入して経済活動が盛んになっている。出版活動も文革後の1980年代前半に比べれば圧倒的な量である。あらゆる分野で参考となる文献は増えたが、同時に水準の低いものも増大した。以前は、厳格な審査を通った原稿が計画出版されていたことから、我々は出版社を選ぶだけでも(例えば中華書局など)水準の高い文献が手に入れた。しかし、今はそれを自分で選択しなければならぬ。外国の出版物であるので、専門店に行っても手に入らなければ分からない、読んでみなければ分から

ない、従って読んだ人の情報が重要になる。インターネットの世界も同様である。あらゆる情報の中で、何が自分に最も意義を持つのかは全て自分の選択による。選択能力を持つには、今のところ多くの時間を割いて試してみるしかない。インターネットは便利だが、無秩序なのだ。それが便利さを勝ち取るための大きな時間的浪費を強いているのである。これに対処することが批判的受容力であり、これを表したことはもう一つの情報リテラシーではなかるうか。

最後に、我々の近未来に大きく係わるように思われる次の話を紹介しておきたい。

私の義理の父は、退職後に鉄道の旅に興味を持ち、時刻表で様々な連絡経路を立てて旅行するのが趣味である。先日、父は北海道から東北に回ろうとして熱郭(ネップ)という駅を乗換地点とした。東京の駅員がその駅を知らなかったことはともかくとして、なぜそこで乗り換えるのか、父が距離計算や有効期限などから決めたことを理解してもらうまで十分

も説明したというのである。通常の旅客相手なら問題ないが、父のような変わったプランに駅のコンピュータが対応できないことはよいだろう。しかし問題なのは、昔はマニア以上の知識を持った人がそこにいて、時刻表一つで何でも応対してくれたのが、今は人間も対応できないのか?ということである。今は、目の前のコンピュータに路線を入力すれば駅名が選択になり、駅名を選べば金額や有効期限が自動的に算出される。その部分をコンピュータが代わりにやることで駅員がその部分を思考しなくなったということではないか。無論、今の駅員にはコンピュータを使うための能力が求められている。だがそれによって専門職員が専門性を失っていることにはならないか。情報リテラシーと併せて、便利さに隠された無思考化に、われわれはよく注意しなければならない。

(さとう・まさみつ

中国語学中国文学研究室助教授)

自然科学と情報リテラシー

伊藤 一郎

本年4月からのカリキュラムでは、すべての学生が「情報処理」を必修科目として履修することになる。これは、教育職員免許法の改定に伴い、社会人に求められる資質能力である「情報機器の操作」を修得するためのものである。全学での情報リテラシー教育がこうしてやっと始まり、本学の情報教育にとって新しい段階に入る意義のある新学期である。

図書館の今回の企画は、人文科学・社会科学・自然科学それぞれの立場からの情報リテラシーを考えるとのことであり、私には自然科学の立場からという役割が与えられた。しかし、自然科学というのは自然物という対象があって成立する学問であるが、「情報」というのは、まさに対照的な人工物そのものである。

「情報科学」が自然科学の一分野でないことは明ら

かであり、理科系・文科系という分類にもあてはまらない。「情報リテラシー」という言葉も、少し前までは「コンピュータ・リテラシー」と呼ばれていたが、最近では「情報コミュニケーション・リテラシー」と呼ばれたりもしている。いわゆる情報技術が、コンピュータの技術とネットワークの技術の両者を結びつけた結果、新しい科学や新しい社会構造を生み出したため、「情報」を学ぶことは「コンピュータ」を学ぶことではないのである。しかし、たとえば「情報」についての先駆的な仕事をしたC.E. Shannonは、物理学における「エントロピー」の概念とのアナロジーから「情報」を捉えようとした。情報ネットワークは、先端的な科学技術に依存して発展している。「情報」は理工系諸科学とは長く密接な関係がある。そこで本稿では、コンピュータとの関わりの面

から「情報リテラシー」について考える。

自然科学においては、実験や観察のデータ処理などの計算器具として早くからコンピュータが有効に利用され、その間に蓄積されたノウハウも大きい。また、理論的な計算の道具としてコンピュータが重要な役割を果たしたのも非常に多い。例えば、数学の分野でも、平面地図の塗り分けに関する4色問題は100年程の間未解決問題であったが、4年半にわたるコンピュータを利用した計算結果により解決されるなど、コンピュータ研究の道具として利用されている。自分の研究目的を達成するために、コンピュータを利用してきたのである。

理工系の研究をする者は、必要ならば実験機器・器具を自分で工夫して作る。実験器具は、自分の研究の目的を実現するために使うものであり、その作成や使用が目的ではない。さらに、それを使用して得られた結果に対して、自分で評価をすることが可能なのである。仮説とその検証という明確な研究形態(=自己表現)を通して、自然科学は大きく着実に発展してきたのである。コンピュータの出現で、利用する能力さえ身につければ自分の目的を遂行するための新しい有力な道具となるものが増えている。情報機器は道具であり、特にパソコンは文字どおりパーソナルな自分のための道具である。

情報機器を操作して自己実現するための簡単で本質的な方法は、コンピュータを利用して(=情報機器を操作して)自分の意図するままに動くものを作ること、すなわちプログラミングである。理工系の研究のためには、研究者自らがコンピュータを利用するため

のプログラミングを行っていた。そこで、プログラミングというと直に、理科系、コマンドを書き並べるプログラム言語などと思いつける人も多いが、アプリケーションソフトのマクロ言語や、TeXやWEB文書記述のマークアップ言語も広い意味でプログラミング表現と考えられる。とすれば文化系も理科系もない。自分のしたいことを明確に表現し、コンピュータからのアウトプットに、自分の意図通りのものが得られるようになったことを確認するまでの過程・体験を通して、機器を操作することの意義を学ぶことができる。とくに、最後の確認・検証ができるということが重要なのである。さもないと、コンピュータというブラックボックスが出すものを評価もせず答えとして信じる、というようになる。こうした事態に陥ってはならない。「情報機器の操作」という言葉は、機器の取り扱い方でもアプリケーションプログラムの利用法を指すのではなく、操作を行なうことのできる主体である人間を育てることであり、プログラミングの体験を通してその趣旨が修得できるものと考えられる。

「読み書きそろばん」の基礎学力が、学問研究はじめあらゆる社会活動の基になっているように、「情報リテラシー」もこれからの自己実現の基本となるものであるが、本学の「情報処理」の時間内だけで達成できるわけではない。むしろ大学教育のさまざまな場面でその能力を十分に育成する努力が求められている。

(いとう・いちろう 数学研究室助教授)

学位論文と ProQuest Digital Dissertations

1. はじめに

引用文献や参考文献に記載された図書を探しているときに、最近の出版物でありながら Webcat でも全く所蔵が検索できないといった文献があります。国内に所蔵のない図書も確かにありますが、著者が単独で出版者が大学の場合、「学位論文」であることが多いようです。本来は参考文献への記載の際には、学位論文であることの表示として学位名を付すのが普通です。しかし、これが守られないと一般図書との区別ができません。

さて、学位論文は雑誌論文と比較して詳細な論文が多く、特に博士論文は独創性が高く質的に優れたものが多いため、研究資料としての価値が評価されています。しかし、学位論文は学位取得のため大学に提出される、いわば報告書で、数部しか作られないことが普通です。また、もともと流通することを目的としたものでもありません。ですから、大学図書館でも当該大学で学位を授与したものぐらしか所蔵していません。入手するのに困難な資料の一つになっています。

しかし北米の学位論文に限っては、その抄録、複製、頒布業務を行っている University Microfilms International(UMI)社があります。図書館では学位論文の目録としてUMI社が発行している博士論文の抄録誌『Dissertation Abstracts International(DAI), Sec. A & B & C』、北米の主題別大学別の博士論文リスト『American Doctoral Dissertations(ADD)』、およびそれらの索引『Comprehensive Dissertation Index(CDI)』を購読してきました。しかし、2000年の1月からこれらの冊子体の目録に代わり、学位論文のオンラインデータベースである ProQuest Digital Dissertations を導入しています。

今回はこの新しいデータベースの使い方を紹介するとともに日本の博士論文についても少しご説明したいと思います。

2. ProQuest Digital Dissertations

Digital Dissertations には前記の、DAI、CDI、ADDに加え修士論文の抄録誌である『Masters Abstracts International (MAI)』も含まれています。アメリカで最初に学位論文が受理された1861年以降の学位論文が収録されており、1980年以降のデータには350語以内の著者抄録が含まれています。また、1988年以降の修士論文には150語の抄録が含まれています。1000を超える北米及びヨーロッパの大学をカバーし、毎年約4万7000件の博士論文と約1万2000件の修士論文が追加されています。現在は約150万件のレコードがあり、その内100万件以上にはUMI社のオーダー番号が入っていて、全文の入手の申込みもオンラインで行うことができます。

2-1. ログイン

Digital Dissertations は学内（小金井地区）の端末からインターネットを介して利用することができます。さて、図1が初期画面です。図書館ホームページの『オンラインDB・電子ジャーナル(学内限定)』



図1 初期画面



図2 main画面

をクリックし、「オンラインDB・電子ジャーナルライブラリー」のページの『ProQuest Dissertation Abstracts Complete』をクリックすると現れます。

さらに『Continue to ProQuest Digital Dissertations』をクリックすると図2の簡易検索画面 (main) が現れます。

2-2. 検索

基本的な検索はmain画面で行います。ここではキーワード、著者名、論文番号によって検索します。また、『main search』または **search** をクリックすると図3の詳細検索画面 (search) に移行します。

詳細な検索はsearch画面で行います。ここでは検索結果の集合番号の利用やフィールドの限定といったより複雑な検索が可能です。



図3 search画面

2-3. 検索結果

検索を実行するか、search画面で **View Titles** ボタンをクリックすると、検索結果一覧が20件単位で表示されます(図4)。さらに論文のタイトルをクリックすると、抄録を含むレコードの詳細を表示します。なお1997年以降の一部のレコードには **Preview** が表示される場合がありますが、これをクリックすると、本文の最初の24ページが表示されます。

2-4. マーク付きレコード

必要なレコードのMarked Listのチェックボックスにチェックを付けると、そのレコードだけを後で表示、印刷、保存したりメール送信することができます。

マークしたレコードだけを表示するには **marked list** ボタンをクリックします(次頁図5)。ここで **Print List** ボタンは印刷、**Download List** ボタンは保存、**Email List** ボタンはメール送信の画面に移行します。

2-5. オンラインでの注文

表示画面(図4)に現れる shopping cart のチェックボックスにチェックを付け、**shopping cart** をクリックするとオンラインでの注文画面になります。必要な情報を記入していけば、その場で論文の全文をダウンロードすることもできます。但し、これは利用者とUMI社(現在はBell & Howell社の一部門)との直接契約(クレジットカード払いのみ)となります。

全文ダウンロードできるものは **5.19Mb image-only PDF** などと表示されているレコードです。なおPDFファイルには'PDF Image Only'と'PDF Normal'の2種類があります。'PDF Image Only'はビットマップページの集まりで、オリジナルを忠実に再現していますが、語句検索などはできません。'PDF Normal'は本当のデジタルドキュメントで、語句検索だけでなく、カラー図版の使用やマルチメディアの埋め込みなどがされているものもあるそうです。

2-6. 論文の利用

5.19Mb image-only PDF の表示が無くても、UMI社のオーダー番号があればオンラインで注文したり、UMI社の国内代理店から入手することができます。

また、科学技術関係であれば、国立国会図書館の科学技術資料室が収集に努めていますので、『海外科学技術資料受入目録』(現在は休刊中)などによりその所蔵を調べてから、UMI社へ申し込んだ方がよいかも知れません。科学技術資料室ではヨーロッパ

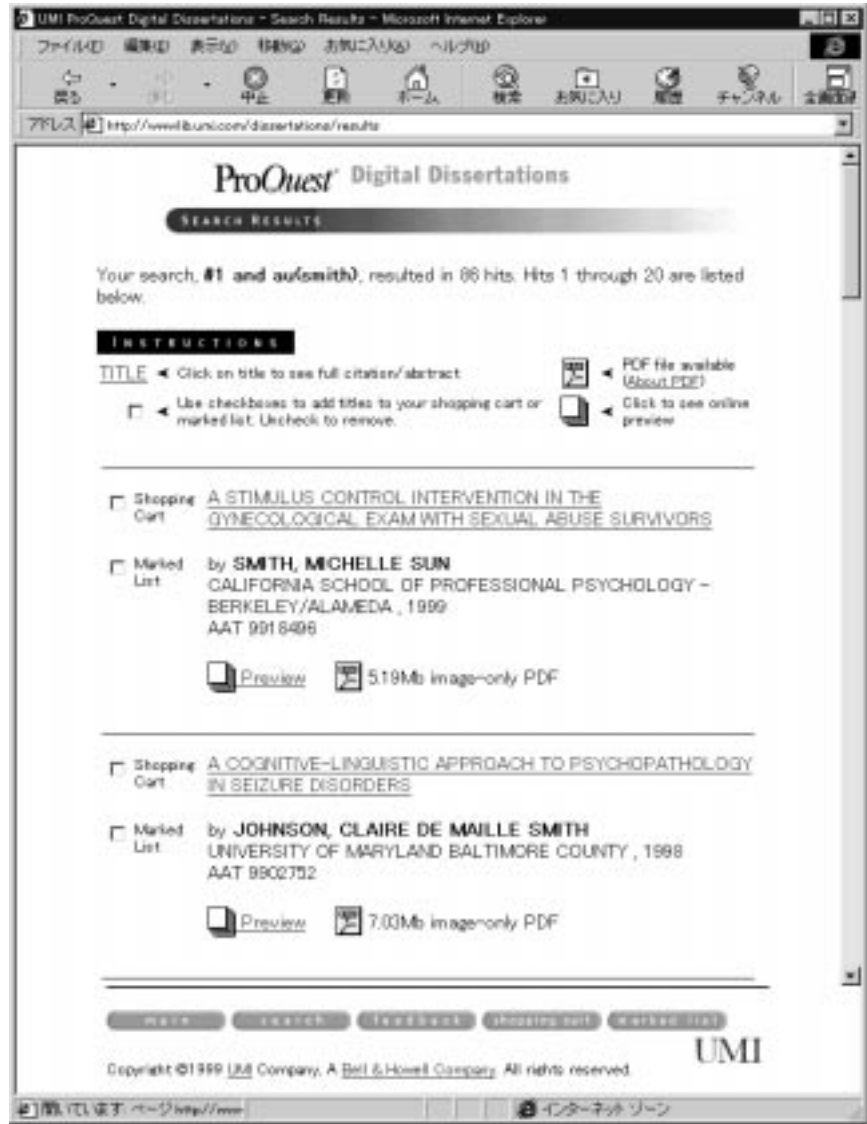


図4 検索結果一覧

の科学技術関係の博士論文も収集しています。

オーダー番号が表示されていない場合などは、国立国会図書館や大学図書館の所蔵を調べていくこととなります。何らかのかたちで公開されていれば入手は比較的可能です。直接学位を授与した大学(図書館)に問い合わせなければならないことが多いようです。

3. 日本の博士論文

日本の博士論文は国立国会図書館に納本することになっており、支部上野図書館で所蔵していました。所蔵目録としては『国立国会図書館所蔵博士論文目録』(377.5/Ko49)が刊行されています。しかし、支部上野図書館は国際子ども図書館に衣替えされるこ



図5 マーク付きレコード

となり、博士論文は本館に移送され、現在は利用休止（再開は平成14年度以降）になっています。

従って現在、ほとんどの日本の博士論文の利用は直接学位を授与した大学(図書館)に問い合わせることになります。なお、一部の大学では学位論文の目録や抄録を公開していたり、全文をホームページ上に掲載している大学もあります。

索引としては『日本博士学位論文索引』が医学を除き分野別に刊行されており、1958年3月から1976年3月までを、また『日本博士学位録 昭和52年版』が1976年4月から1977年3月までをカバーしているぐらいでした。しかし、オンライン情報検索システムのNACSIS-IRに「学位論文索引データベース」があり、これによって1959年以降(大学により収録開始時期が異なります)の博士論文が検索できます。これは有料のシステムですが、「学位論文索引データベース」については時間と機能が制限されるものの、お試しということで無料で試験利用することができます。詳しくはNACSIS-IRのホームページ(<http://www.nacsis.ac.jp/ir/ir-j.html>)をご覧ください。



図6 学位論文データベース

4. 学芸大学の学位論文

学芸大学では昭和41年に大学院修士課程が設置され、平成8年に連合大学院として博士課程が設置されました。

その修士論文・博士論文はすべて図書館で保管しており、図書館ホームページで目録情報を提供しています。「当館作成DB」をクリックすると「学位論文(修士及び博士)目録データベース」にアクセスできます(図6)。検索項目は、論文種別、論文題目、氏名、専攻・講座名、請求番号になっています。

なお、学位論文の利用は館内閲覧のみです。また、著者の許諾を証明する書類がないと複写はできません。(金子俊明 情報サービス課参考調査係長)

図書館オリエンテーション

今年度の図書館オリエンテーションの日程が決まりました。

・新入生のための図書館オリエンテーション

今年も4月17日から21日までの5日間で「新入生のための図書館オリエンテーション」を実施します。館内を廻りながら、40分程度で図書館の利用方法をご説明します。自由参加ですが、日によって実施時間が異なりますので、館内の掲示で時間を確認して下さい。

・文献の探し方オリエンテーション

「文献の探し方オリエンテーション」を5月と10月に開催することになりました。1時間程度で簡単な文献の調査法や入手方法について説明します。

前期は、5月15日から19日、22日から26日の10回、後期は10月23日、24日、26日、27日、30日から11月2日の8回で、各回とも定員6名の予約制です。図書館2階の参考調査カウンターに申し込んで下さい。

LLBA がネットワークで検索可能に

ネットワーク CD-ROM サーバーで利用できるデータベースとして『雑誌記事索引』、『ERIC』、『PsycLIT』の3種類を提供してきましたが、新たに『LLBA(Linguistics and Language Behavior Abstracts)』が加わり4種類になりました。

LLBAは言語学とその関連領域の文献データベースです。収録範囲は1973年以降で、全世界から集められた数百の逐次刊行物の文献の抄録が提供され、さらに新刊図書、不定期刊行物、モノグラフ、テクニカルリポートなどによって補完されています。

検索ソフトがERICやPsycLITと同じものですので、検索方法はERICやPsycLITと同じです。もちろん学内LANに接続したパソコンなら24時間いつでも利用できます。

なお、冊子体のLinguistics and Language Behavior Abstractsの購入は中止いたしました。

International ERIC の紹介

教育関係の索引・抄録誌としてオーストラリアの『Australian Education Index (AEI)』とイギリスの『British Education Index (BEI)』を購入してきました。しかし今年から冊子体にかえて、そのCD-ROM版である『International ERIC』を導入することになりました。

International ERICに収録されているAEIには1978年以降のモノグラフ、雑誌論文、会議録、レポート、学位論文などの情報が提供されています。また、BEIには1976年以降の雑誌論文と1950年以降の学位論文の情報が含まれています。これに『ERIC』を加えることで英語圏の教育関係の文献情報を網羅的に検索することができます。

ただし、ネットワーク CD-ROM サーバーで提供している『ERIC』と違い、図書館2階の CD-ROM 検索コーナーでの利用となります。ご利用の場合は図書館2階の参考調査係にお申し出ください。

平成12年度前期図書館暦(4月～9月)

日	4月		5月		6月		7月		8月		9月		日	
1	土	休館	月		木		土		火		金	延長再開	1	
2	日	休館	火		金		日		水		土		2	
3	月	3,4年オリエンテーション	水	憲法記念日	土		月		木		日		3	
4	火		木	休日	日		火		金		月	教育実習開始～10/13	4	
5	水	延長開始 3,4年授業開始	金	こどもの日	月	教育実習開始～6/23	水		土	休館	火		5	
6	木		土		火		木		日	休館	水		6	
7	金	学部入学式	日		水		金		月		木		7	
8	土		月		木		土		火		金		8	
9	日	大学院入学式	火		金		日		水		土		9	
10	月	新入生オリエンテーション	水		土		月		木		日		10	
11	火		木		日		火		金		月		11	
12	水	1,2年授業開始	金		月		水		土	休館	火		12	
13	木		土		火		木		日	休館	水		13	
14	金	連合大学院入学式	日		水		金		月		木		14	
15	土		月	文献の探し方オリエンテーション	木		土		火		金	敬老の日	15	
16	日		火		金		日		水		土		16	
17	月	新入生のための図書館オリエンテーション	水		土		月		木		日			17
18	火		木		日		火		金		月			18
19	水		金		月		水		土	休館	火			19
20	木		土		火		木	海の日	日	休館	水			20
21	金		日		水		金		月		木		21	
22	土		月	文献の探し方オリエンテーション	木		土		火		金		22	
23	日		火		金	教育実習終了	日		水		土	秋分の日	23	
24	月		水		土		月		木		日		24	
25	火		木		日		火		金		月		25	
26	水	休館・館内整理	金		月		水	休館・館内整理	土	休館	火		26	
27	木		土		火		木		日	休館	水	休館・館内整理	27	
28	金		日		水	休館・館内整理	金	授業終了	月		木		28	
29	土	みどりの日	月		木		土	休館	火		金		29	
30	日		火		金		日	休館	水	休館・館内整理	土		30	
31			水	休館・館内整理 創立記念日			月		木				31	

* 臨時休館日については、その都度掲示しますので、ご注意ください。

授業期 平日(月～金) 開館時間 9:00～22:00

休業期 平日(月～金) 開館時間 9:00～17:00

土・日・休日 開館時間10:30～16:30